



TITLE:

<大會抄録>フラグ=ウルスの六王道

AUTHOR(S):

本田, 實信

CITATION:

本田, 實信. <大會抄録>フラグ=ウルスの六王道. 東洋史研究 1977, 36(3): 487-487

ISSUE DATE:

1977-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153663>

RIGHT:

元朝の皇帝直轄領と北元の六萬戸

岡田英弘

元史地理志を見ると、帝國は中書省の直轄の腹裏と、十一の行中書省に分れ、それぞれ路・府・州・縣を領して、典型的に「中國」的な中央集權制度のように見えるが、これはもちろん錯覺である。元朝の實體は多數のノヤンたちの私領の集合體で、ノヤンの一人が皇帝に選ばれて、個人の收入で中央政府を運営しているに過ぎない。元朝がモンゴル高原に驅逐されたあと、残った主要なウルスは六つあった。これがダヤン・ハーンの六萬戸になるのだが、その一つはケンテイ山から大興安嶺、陰山、甘肅へかけて元代に繁榮した封建領の直接の後身である。

フラグ・ウルスの六王道

本田實信

ハムダラーフ・ムスタウフィーの『心魂の歡喜』(1340 A. D. 〔ペルシア文〕)の地理篇道里記には、第八代イルハン、オルジェイト(一二四〇—一二三六)の新首都スルタニアを起點として「イランの地」の境界點に至る六本の王道 (shāhrāh) が詳しく記されている。

この六王道は、スルタニアを起點とするフラグ・ウルスの驛站制 (Yām-Yānī) の整備を示すものと考えられる。

この六王道が、フラグ・ウルス内でどのように利用されていたか、それは當時の國際交通幹線にどのように接續していたかを調べてその機能を確め、さらにフラグ・ウルスにおける驛站制の沿革を論じてみたい。

水利と地域經濟組織

斯波義信

中國史において、唐宋時代に水利に關する農業土木開發が劃期的な發達をとげたことは異論のないところである。ところでこの水利問題の及す效果、影響を客觀的に判斷するためには、制度史や國家・在地勢力雙方の權利や利害の消長についての概括的議論のほかに、むしろ前提として解決を迫られる課題が存在する。かりに、舊開地においてより高次の水利の安定を志向する土木技術的發想が生じ、江南地域における如く現實に一定の安定狀況が唐、宋、元、明にかけて將來されたとすると、そこには當然に、植民定住、都市化を含む居住空間、生態的環境そして人口密度の變化が豫想され、水利の果す機能や、立地の制約する技術條件や、新舊開地間の人口シフトの程度差などのヴァリエーションを示しながらも、究極には新しい水利開發は當該地域の社會經濟を再編して行ったに相違ない。本報告では、浙江北部の地域經濟の具體例を中心として、地域レベ